

洋風画屏風の成立と徳川家康側近の家臣・特権的商人

岡田裕成（大阪大学）

王侯騎馬像や世界地図、田園での遊樂などを描いた洋風画屏風は、おおむね 17 世紀初頭に成立したとみられる。これらの作品は従来、イエズス会主導のもと、大名ら有力者への贈物として制作されたものとの想定が概ね受け入れられてきた。しかしその見解に具体的な裏付けはない。本発表ではまず、イエズス会系の図像源泉に由来するとみなされるモチーフについて検討し、それらが一方で、イエズス会やキリスト教に直結する重要な要素をしばしば意識的に排除・変形していることを示す。同時に、それらイエズス会系モデル由来のモチーフ群が、オランダ、スペイン、植民地メキシコなどとの交渉に由来する別系統の図像と、随意に組み合わせられている点も検証したい。

では、外来の要素をそのように選択・操作しつつ、屏風という伝統的媒体の上に再構築した主体は、日本のどこに、どのようなかたちで存在したのか。洋風画屏風が成立したとみられる 17 世紀初頭は、豊臣秀吉の没後、徳川家康が権力を確立していくなか、外交やキリスト教政策において多極的な動きが目まぐるしく展開した時期であった。家康は、秀吉没後 2 ヶ月足らずの 1598 年 11 月、スペイン国王保護権下のフランシスコ会の潜伏宣教師を召し出し、みずから貿易や銀山開発技術導入についての交渉を行った。また、1600 年には、漂着したオランダ船の乗組員ウィリアム・アダムズらを引見し、海図などをもとに世界の情勢について詳しい聞き取りを行なった。駿府への各国、各修道会からの使節の訪問も活発であった。こうした交渉の場で大きな役割を果たしたのは、その能力により家康が直接取り立てた後藤庄三郎光次、長谷川左兵衛藤広らの近臣、あるいは、三代茶屋四郎次郎清次ら御用の特権的商人であった。彼らは外国使節の接遇を担って贈物の受領にも関わった。また、長崎奉行を務めた長谷川や、一時その養子となっていた茶屋清次は、1612 年頃から急速に強まったキリスト教統制の動きのなか、教会の破却や図像類を含む資産の没収に携わった。本発表では、洋風画屏風を構成する図像素材や、それについての知識を集約しうる存在が、こうした家康側近の家臣・特権的商人の比較的小さなサークルであったことを、レパント（チュニス）戦闘図屏風に関する発表者の既刊論文も踏まえつつ明らかにする。

『狩野派絵画史』において武田恒夫は、洋風画屏風の代表作《泰西王侯騎馬図》について、「在来の画法に対してかなりの素養のあった画人」によるとし、そのうえで、キリスト教やヨーロッパ絵画と関わった狩野派門人の存在に注意を促した。京の茶屋清次や、やはり京町衆出身であった後藤の周辺は、そうした在来・外来の画法の接続する場でもあった。本発表は武田の論をそのまま支持するものではないが、イエズス会に限定されない文化交流の回路が交錯するなか、外来の図像素材や知識を作品化しえた制作者像についても所見を示したい。